

〔研究論文〕

在日済州島人と故郷の関係—創られる故郷・新たな関係の模索をめぐって

高 鮮徽

〔Article〕

**Home for the Zainichi, Jeju Islanders Living in Japan :
Towards a Good Relationship with an Imaginary Home****Sun-Hui KOH****Abstract**

Jeju islanders have a long history of living in Japan. For a good understanding about Jeju people living in Japan, one can look at the recent situation between Japan and North Korea and Japan and South Korea. Relations between Japan and North Korea are getting worse and worse, as reflected in the discrimination suffered by Koreans in Japan. In contrast, there is a good impression about South Korean popular culture in Japan. At same time, there are strongly expressed opinions like Manga'hate (South) Korea', which makes the relationship completely ambivalent. The Jeju islander community has also changed with time. The first generation of islanders have maintained the relationships between their Jeju home village and the Jeju islander community in Japan. But the numbers of this generation are declining. For the second and third generation, Jeju is no longer 'home'. Their relations with their parents and relatives have also changed.

Keywords : Zainichi; Korean in Japan; Neoliberalism; Home; Migrant community; South Korean popular culture (Hanryu).

1. はじめに

本稿は、済州島で開かれた在外済州島人の愛郷心に関するセミナーで、在日済州島人と済州島(故郷)の関係について報告したものを基にしている¹⁾。

本論の目的は、済州島(人)に対して在外島民として歴史が長く、最大の集団でありながら、済州島の発展に多くを貢献してきた人々として在日済州島人への相互理解を求めるものである。そのために、在日済州島人が置かれている状況を知り、今後、どのような関係形成が可能かを模索するための試論である。

論文の構成は、以下の通りである。まず、在日済州島人をめぐる近年の状況を知るために、2000年以降の日本社会の変化、韓国と日本の変化、北朝鮮と日本の変化などをみていく。それらを踏まえて、在日済州島人コミュニティの変化、世代交代などを取り上げる。それから、韓国社会の変化と済州島の状況を知る。そして済州島との関係を主導してきた在日済州島人1世と2

世が取り持つ故郷との関係性の持ち方の違いを取り上げる。最後に、在日済州島人と済州島人が取り持つ、今後の望ましい関係形成のあり方について模索することを課題としている。

2. 2000年以降日本社会の変化

日本社会は、2000年代に入って大きな変化を迎えている。その変化は、日本で暮らす日済州島人に様々な影響を及ぼす。まず、2000年以降の日本社会の変化、政治、経済的な側面を概観することにしよう。

日本は、1980年代後半いわゆるバブル景気と呼ばれる経済の好景気を経験した。1986年12月から1990年までをバブル景気だったといわれている。バブル景気が崩壊し、「失われた10年」または「平成不況」と呼ばれる経済不況の中で2000年という新しい世紀を迎えた。新しい世紀の始まり、2000年をミレニアムと称してはやされていた。当時は、まだ日本がいかに深刻な長期不況を迎えているかを一般の人々が深刻に受け止め、実感するほどではなかった。そこには、日本の経済基盤が安定していることと国内景気が悪くても輸出は好調であったため、ある程度維持が可能だったためである。もうひとつの要因として、政府やマスメディアが国民が深刻な不況という現実認識に結びつくような情報提供をしていなかったことがある。その背景として、太平洋戦争後、1955年に結成された自由民主党(通称自民党)による統治が2009年民主党に政権交代するまで持続した長期執権が挙げられる。民主主義を標榜しながら実質的には、長期の一党統治による政府とマスメディアの癒着関係により、政府に不利な情報を流さないという情報コントロールがある。しかし、そのような側面が表面化することはあまりないため、政府によるマスメディアの情報コントロール自体話題になることがほとんどない。

2001年から小泉総理が新自由主義に基づく諸政策を積極的に実行した。もっとも印象に残るものとしては、バブル景気崩壊以降山積していた不良債権を整理し、規制緩和を通して経済の活性化を促した(後に、格差の拡大現象を促したことになるが)。それに、郵政や特殊公団の民営化などを行った。

小泉総理は、それまでの総理と違い魅力的な外見と人々の感情に訴えるわかりやすい言葉遣いなどタレント的な気質をもっていて、総理のポスターが人気を博したほどであった。また、小泉政権が始まる当時人気があった田中真紀子氏を外務大臣に起用するなど、ポピュリズムを利用した政治として「小泉劇場」と呼ばれた。小泉総理は、伝統的な自民党体質ではないため、自民党内での基盤が強いわけではなかったが、国民の高い支持率が大きな支えになり長期在任を可能にした。多くの日本国民は、それまでの総理にみることでできなかった感情を直接的に表現するわかりやすい小泉総理に熱狂した。

もうひとつ、日本とアメリカの関係において、太平洋戦争後、日米安保体制のもとで両国は特別に緊密な関係を形成してきた。しかし、総理大臣自らが全面的に親米の感情を露にすることは、珍しい。しかし、小泉総理は積極的に親米を表明し、当時のアメリカ大統領ジョージ・W・ブッシュとの個人的に特別な親密振りをアピールしながらアメリカを全面的に支持する姿勢を明確にした。たとえば、2001年アメリカのアフガン侵攻に対して、後方支援という名目で自衛隊を派遣し、2003年のイラク侵攻の際も自衛隊を派遣した。日本では、「自衛隊」を軍隊だと認識していないし、海外に派遣された自衛隊が戦争には直接関わらないことを日本国民に周知させているが、実質的には友邦国アメリカの戦争に協力している。そして、自衛隊が自身の安全確保のために武装している

ことも事実である。日本が戦場において平和維持や人道的復興支援のための活動を行うのであれば、自衛隊という軍隊ではなく民間人専門家を派遣するほうがより効果的であろう。それは、軍隊を派遣することで発生しうる不必要な緊張を緩和させることができる。

小泉総理は、日本国民の支持を基盤に2001－2006年にかけて5年以上の長期執権したが、靖国参拝の強行などの保守的な傾向をはっきり表明することで周辺国家との摩擦を呼び起こすことも少なくなかった。

それにもかかわらず、小泉総理が行った政策は、日本の経済不況がますます深刻になり批判にさらされる側面と、その後の総理が1年程の在任で途中下車が続き、日本国民にはいまだに鮮明に記憶に残る印象的な総理となっている。しかし、自民党の長期執権を終わらせる要因のひとつであった世襲政治家、世襲総理1号でもある。ちなみに、その後続く安部、福田、麻生、そして民主党の鳩山氏も世襲総理であった。

3. 日本と北朝鮮との関係の変化

在日朝鮮・韓国人(以下在日)の弾圧につながる日本の北朝鮮の関係の変化をみよう。北朝鮮との劇的な関係改善と同時に関係悪化に向かったことも小泉総理時代であった。

まず、関係改善に向かった点から先に見ることにしよう。2002年9月の小泉総理のピョンヤン訪問、初の日朝首脳会談、過去の清算と国交正常化に向かう話し合い‘日朝ピョンヤン宣言’は、全く予想だにできなかった言葉通り劇的な出来事であった。その間、北朝鮮は日本人に良い印象を与えることもないが、改めて嫌う必要もない日本が思うようにできないとても不便な関係の隣国であった。しかし、植民地支配という歴史的な関係があり、戦後50年以上経っても、戦後処理が清算できていない後ろめたさがあることも事実、可能ならば国交正常化をすることが望ましい関係でもあった。そのような長年の大きな課題を一気に解決してしまいそうな、新しい雰囲気ピョンヤン訪問を生中継しながら作られていった。それが、日本と北朝鮮の関係改善ドラマのクライマックスであった。同時に、日本と北朝鮮の関係が最悪に向かうドラマも、そこで始まっていた。

小泉総理が初めてピョンヤン訪問時(2002年9月)日本人拉致被害者が北朝鮮にいることが北朝鮮当局により確認された。小泉総理のピョンヤン訪問一ヶ月後、拉致被害者の一部が里帰りのため日本に戻った。当初北朝鮮との約束は、一時的な訪問であったが、日本の世論と家族が引き止めたことにより、拉致被害者らは北朝鮮に帰らなかった。その後、日本では北朝鮮による‘日本人拉致被害者’問題が主要な政治・社会的なイシューとして定着、マスメディアを動員して何年にも及んでその問題に執着し、国民の関心を集中させることに成功した。それは、北朝鮮バッシングになり、極端な‘北朝鮮イジメ’につながって行く。2004年5月小泉総理が二度目のピョンヤン訪問後、対北朝鮮経済制裁を始める。その最たるものとして、2006年7月在日朝鮮人が北朝鮮を訪問する際使われるマンギョンボン号の入港禁止が挙げられる。マンギョンボン号は、北朝鮮の元山と新潟を結ぶ不定期貨客船であり、北朝鮮と日本を直接つなぐ、モノと人を運ぶ象徴的なものでもあった。日本政府の入港禁止理由として、北朝鮮によるミサイル発射と同年10月の核実験に伴う制裁措置の一環としている。それは、日本の在日朝鮮人と北朝鮮をつなげるものを切断することにより、北朝鮮を政治・経済的にもっと孤立させる一方、日本に生きる在日朝鮮人への圧力を強めたことになる。それから、アメリカをはじめとする世界の世論に日本人拉致被害者問題をアピールし、北朝鮮への経済制裁などの北朝鮮への圧力に同調することを求め、北朝鮮を孤立させることに成功した。

小泉の次の総理は、拉致被害者問題に強行に対処した安倍晋三であったことにより、‘北朝鮮イジメ’が日本国民を統合させる主要なイシューであり、求心点であったことがうかがわれる。たとえば、仮想敵国として北朝鮮を経済制裁などを動員して攻撃することで、国民のナショナリズムを刺激した。それにより、自国の政治や経済状況に対する社会不安を北朝鮮へ向けることに成功した。これは、表面的に対北朝鮮関係や対北朝鮮政策、もっと言うと金正日独裁体制への批判という様子であるが、実質的には、日本国内に生きる在日朝鮮人に対する弾圧として働いた。在日、とくに‘朝鮮籍’の在日朝鮮人に深刻な影響を及ぼした。その代表的な機関である‘朝鮮総連’と関係する在日朝鮮人社会が壊滅的に崩壊し、精神的に頼るすべを失ってしまった。

‘北朝鮮イジメ’は、日本の長期的かつ深刻な不況により膨らんでいた人々の不満を解消する突破口として、非常に適切なものであった。イメージとしての‘北朝鮮’は、憎むべき対象である金正日独裁体制かも知れないが、事実上もっとも被害を受けた人々は、それまで日本に生きる人々として同じく日本社会を構成してきた在日朝鮮人であり、食糧不足により飢え死していった北朝鮮の人民ではないだろうか。もちろん、それには北朝鮮による日本人の拉致という国家による犯罪があるが、その仕返しとして、直接その犯罪とは無関係な一般の人々・とくに社会的弱者への圧力として返された。日本の人々にとって、‘対北朝鮮’や北朝鮮と関連がある‘朝鮮籍’の人々、‘金正日政権’への圧力を加えたことになる。実際には、それこそ罪のない在日全般、そして外国人の多数を占めている韓国人と中国人までも生き難くなった、その間潜在的であった日本人の差別意識が正当化され、差別的な行為が表面化する現象として現れた。

もちろん、日本人のなかには、韓国と北朝鮮を区分していて、2000年以降韓国とは比較的に良い関係を形成しており、韓国に対して好意的に変わった部分もある。しかし、これはあくまでも意識レベルであり、在日を韓国系や朝鮮系として区別できたり、韓国人と中国人を区別し、それに対応できる訳ではない。もっと言うとそれらの人々と日本人を区別することも現実的に難しい。‘金正日政権’への憎しみは、具体的には日本に生きている外国人に向けられ、不特定多数の日本人による外国人に対する差別行動・いじめとして現れた。それは、日本の国内の問題、政治・経済の行き詰まりによる閉塞感やストレス、不満を解消する働きをしていた。しかし、在日に向かう差別は、在日や外国人への差別にとどまらず、日本人内部で小さな差異をもって差別し、いじめる方向に発展した。そのような人々は、外国人を区分し差別していると思うかもしれないが、日本には多様な外国人がいる。その大多数は外見上区別が難しいアジア系の人々により占められており、とくに在日は識別が可能な外国人ではない。しかし、心理的に区別しないとイケない。その結果、社会的な弱者の日本人にも差別が深化される、お互いを信頼することができない社会へ向かっていった。人口の1%台を占める、少数の外国人を区別し、差別することによって日本人の統合をはかったが、実際は多数の日本人同士がお互いを疑う社会になってしまった。本当に、少ない数の人々を正確に区別しようとした結果、社会の方向性と求心点である人間信頼という重要なものを見失ったようだ。

そのような戦々恐々とした雰囲気をもった70歳代の在日2世の表現を借りると「戦時より怖くなった。朝鮮人として生きていくことが怖い」としていた。ちなみに、彼は若いとき不良として通したほど、覇気があり経済・社会的に成功し、様々な在日の団体を代表するほどの人物(韓国籍)である。彼の言葉を聞いた際、日常生活レベルで日々感じる差別の深刻さを教えられた。

4. 日本と韓国の関係変化

日本と韓国の関係も2002年のワールドカップサッカー共催を中心に良いほうと悪いほうへ両極化していく。まず、良いほうを2002年ワールドカップサッカーの共催と近年流行している‘韓流’を取り上げてみることにしよう。2002年のワールドカップサッカーの韓国との共催は、日本にとって喜ばしいことではなかった。そこには、両国にとってサッカーが持っている意味や重要性も異なるが、多くの日本人にあまり知られていない。日本においてサッカーは、野球に比べ人気がなかったスポーツであり、Jリーグというプロサッカーリーグの結成も1993年である。それから若い世代を中心にサッカーファンが増え、いまや国民的に人気があったプロ野球と人気を二分するほどになったが、それでも日本は野球の国といえる。韓国の人々がどれだけサッカーが好きで普及しているか、韓国では国民的スポーツといえるのがサッカーである。しかし、それらのことは日本人にとってあまりかかわりがなく、国家のレベルとして日本と較べられる対象ではないと見ている韓国との共催は、嬉しいことではない。しかし、結果的に2002年ワールドカップサッカーを通して日本人のサッカーファンにとって韓国と近くなる契機をつくったといえる。2002年のワールドカップサッカーの全体的な雰囲気として両国は明らかな違いをみせた。日本の場合、2002年のワールドカップサッカーを多くの人々が楽しむことができたのだろうか。韓国では、準備段階より取り組み方が全く異なっていた。日本にしてみれば、ワールドカップも日本で行われる数多くの国際大会の一つに過ぎないかもしれないが、韓国にとってワールドカップは、特別な国際行事であり、たとえ日本との共同開催であってもようやくその段階に達した誇らしいものであった。それこそ、国民的にワールドカップに向かって準備に取り組んだ。たとえば、タクシードライバーが外国人にに対応するために簡単な英会話を身につけるなど、そして外国人の目線から利用しうる様々なサービスを考えていった。マスメディアでも、外国のサッカーに関する情報が多くなり、日本に住む私が知らないほどの日本人サッカー選手について普通の人々が知っているほどであった。ワールドカップでありながら、韓国人の祝祭として盛り上がっていく準備でもあった。それから、実際にワールドカップが開催されている期間中社会の雰囲気も両国間で全く異なっていた。その期間中、両国間を往来しながら観察した感想である。韓国のインチョン空港(当時まだ新しかった)に降り立つと国を挙げてワールドカップを迎えていることがはっきりとわかるほど、浮き上がっていた。それに比べ、日本は静かだった。記憶に残ることは、ワールドカップが始まる前に過度にフリーガン対策に苦心することと、期間中は、サッカーファンのマナーの悪さがニュースで多く取り上げられた。

2002年のワールドカップで、日本人や韓国人にとっても目新しく驚いたことは、‘赤い悪魔’と呼ばれる、赤いTシャツを着て熱狂的に集団応援をしている韓国人であった。そのような応援の仕方は、日本人にとって馴染みのない韓国人の姿であった。それまで、日本に知られている韓国人ではなかった。それから、サッカー試合そのものも、韓国が準決勝に進出することで日本と差がついてしまった。日本人にしてみれば、‘赤い悪魔’として熱狂する韓国人をみて、韓国社会とそれまでとは異なった見方でみるようになり、遠慮なく感情表現をする人々をみて、ある種の‘恐怖’を感じたのではないだろうか。

次に、‘韓流’の風が吹いた。それまで李成愛、趙容弼、金蓮子、桂銀淑などの韓国の歌手が日本で活動することが珍しいことではなかった。しかし、それは演歌という中高年に支持されるジャンルであり、日本人によって積極的に好意的な反応やその反対も表出されることが少なかった。しかし、2003年NHKで放送されたドラマ‘冬のソナタ’が日本の中高年の女性を中心に人気が出て、

2004年に‘韓流’という流行現象の風が吹き、「冬ソナ」、「ヨン様」が流行語になる社会的な現象を示した後、‘韓流’が定着する段階に入る。‘冬のソナタ’をみて日本人女性が‘ペヨンジュン’いう俳優にはまって(‘韓流’には、‘はまる’という表現を使う)いくとき、その周囲にいた日本人男性は慌てた。わかりやすくいうと、自分の妻が韓国の男に狂ったのである。私も抗議を受けたことがある。同じ大学で働く同僚が、それについて私に抗議をしたのである。私としては、かかわりのないことであった。初期のそのような現象はあくまでもごく一部であり、極端なこととして受け止めた。一年後、その同僚が様々な韓国ドラマに関する解説と、どの店に行ったらこのドラマがあり、人気があるDVDの借り方までも教えてくれた。彼は、私が韓国人だから韓国ドラマに興味があり、見ているとおもったのだろう。そして、韓国の男に狂ったという妻と一緒に韓国ドラマを見ていることも告白された。他の同僚も、その事実だけを告白するために私の研究室をノックした。恥ずかしそうに、韓国ドラマを妻と二人で見ていることをまるで秘密を明かすかのように告白してきた。それには、やってはいけない反社会的な行為をやっているような雰囲気さえ漂った。学科事務室で出張時のホテルでAVをみたことを恥ずかしげもなく言える人が、家で韓国ドラマをみていることは恥ずかしいことだろうか？日本の人々にとって韓国ドラマを見ること自体何らかの境界を越えるという意味である。韓国という国とその文化は、日本人にとって‘特別な’意味を持っていたのである。単に外国の一つだとか、隣の国ではないのだ。ペヨンジュンという俳優が初めて日本を訪問した際、日本のファンの女性たちの行動がワイドショーに出たが、熱狂する中年の女性を理解することができなかった。そして、その理由を知りたいと思い、‘冬のソナタ’をみた。しかし、ペヨンジュンという俳優が日本の中年女性を狂わせた理由はわからなかった。もちろん、韓国ドラマは、韓国の実社会ではなく、フィクションある。しかし、日本の女性はドラマを通して近い国でありながら知らなかった国韓国とその文化に接する。そして、日本との共通点と違いを感じながら、共通点が多い隣の国として好意的に一步ずつ近づいていった。そのようなことは、韓国の文化を接したい人々には韓国語を学ぶ、または旅行をするようなことにつながっていった。

その一方、在日にとって‘韓流’は何だったのか。在日が日本人より‘韓流’を先に受け入れた訳ではない。日本人より遅く、周囲の日本人の話題を聞きながらもなかなか‘韓流’を受け入れることができなかった。これには、心理的な距離と先入観がある。韓国の文化を良く知らない日本人にとって‘韓流’を接することに特別な思い入れがない。‘韓流’を接してはまったり、嫌いになったり、個人の好みや選択の問題である。しかし、在日にとっては、韓国に接する経験と情報が日本人より多いだけに、‘韓流’が日本で流行するという現象がにわかに受け入れがたい。‘韓流’が周囲の日本人に騒がれることを聞いた2世の女性は、はじめ、文化的に遅れた韓国ドラマの話プライドが高い日本人同僚が話題にもりあがることをみて、信じられなかった。それから1年が経ち周囲の人々より一足遅く偶然みたドラマから‘韓流’にはまり、いまや韓国のケーブルTVを見る人に頼んで録画をしてもらい、周囲の日本人同僚より一歩先に立っているという。彼女は、「‘韓流’をみて、日本のドラマをみると面白くない、日本人は、‘韓流’をみて面白いドラマ作りを学んだほうが良い」という。そして、2世の女性が集まると共通の話題は、‘韓流’であり、終わりのない面白い話題になっている。一方、在日は、‘韓流’を見ながら自分たちが韓国人でないことを知る。そして、韓国や韓国の人々についてあまり知らないことを知る。‘韓流’は、在日に韓国を知らせる、日本人にも認められる誇らしいことであると同時に韓国が自分たちが所属した社会でも国でもないことを実感させる。そして何より、‘韓流スター’と呼ばれ日本人女性にもはやされる韓国の男性と自分の夫は、どう見ても共通点を見つけないことができないようだ。それこそ、‘韓流’に出るような韓国人男

性と自分の夫はとても同じ民族と信じられないほど、異なる人々である。

‘韓流’が大きな流行になりもてはやされる一方で、正反対の傾向も強く表出される。2005年に『嫌韓流』という漫画がアマゾンで販売部数1位を占め、それをめぐる論争が繰り広げられる。それに関して、日本の大手マスメディアでは大きく扱わなかった。たとえば、『嫌韓流』の読者やそれを支持する人を日本のごく一部の極端な人々としてみようと、それに対する韓国の反応が敏感すぎるという雰囲気であった。しかし、そのように日本人の感情が両極化したことは、急激に浮上する韓国に対する反感であり‘韓流’と呼ばれる文化現象、とくに日本人女性が韓国の男性(韓流スター)にはまり騒がれることに不快感を表したものと受け取れる。韓国に対する反感は、ごく一部の日本人に見られる極端なものではなかった。2005年の内閣府による「外交に関する世論調査」結果をみても「韓国に対して親しみを感じる」は、「親しみを感じる」ポイントが以前に比べ、大きく下がっている。韓国に対する親近感が増す中、嫌悪感も突出している。

2000年代に入って日本社会は、身近な周辺国家との関係が良い方向と悪い方向が極端になる、まるで精神分裂的な症状をみせる。それは、そのまま日本に生きている在日をはじめ、韓国人や中国人に対して差別として現れた。2011年の東日本大震災以後の変化については別の機会に譲りたい。

5. 在日済州島人コミュニティの変化

次に、在日済州島人コミュニティの変化をみよう。在日済州島人コミュニティは、1世がその中心で2世や3世はコミュニティを離れていく傾向にある。それに小規模の自営製造業に従事していた世代の子供が教育を受け親とは異なる職種に従事する動きに付随するものである。在日の場合、外国人で参政権がないためにコミュニティは政治的に疎外され、周辺地域が開発されてもコミュニティは放置され生活環境の整備が遅れている点もある。それに2世以降の世代が主に日本の学校で教育を受けて育ち親世代が営んできたコミュニティ中心の生活に異質感や、窮屈さを感じることもコミュニティを離れる要因のひとつであろう。

コミュニティの変化の大きな流れをみると、いわゆる戦前日した1世が亡くなっている。そして、1世も高齢化したため一人で自由に出歩けないこともある。1世の女性の活発な動きによって特徴付けられていたコミュニティが2000年代に入って急激にその活気を失っていく。それに、1980年代後半より日本の好景気に出稼ぎに来ていた済州島人も多くいたが、日本の不景気とともに仕事が少なくなったり、取締りの強化などで、その姿を消したことも挙げられる。たとえば、鶴橋や通称‘朝鮮市場’といわれる地域に行くと、道を行き来する人々、ゆっくり通り過ぎる自転車、その間を縫うように下請けの仕事を運ぶワゴン車が通り過ぎ、いつも混みあっていた。そして、その一帯を歩くと‘ヘップサンダル’を縫うミシンの音、接着剤のボンドの匂い、機械の音がして活気にあふれていた。もちろん、日本の不景気や産業構造の変化によってコミュニティの主産業であった小規模製造業の空洞化が主な要因ではあるが、やはり1世が亡くなったことが大きな理由として挙げられる。いまや戦後密航した世代の1世が主役として世代交代をしたといえる。

コミュニティから離れた在日の中には、祭祀や名節などを一緒に過ごすこともだんだん少なくなり、家族関係も疎遠になる傾向を見せながら日本社会に埋没していく。そこには日本人との結婚や家族関係が核家族中心でコミュニティに住む1世や兄弟姉妹とも疎遠になり、解体していく様子がかがえる。そして、2000年代に入り、世代が進むことによる帰化の増加、対北朝鮮関係の悪化、経済制裁などにより強化された差別から逃れるために帰化するなどがある。日本人との結婚は、在

日の女性と日本人男性が多い印象があるが、在日の男性と日本人女性が結婚するケースも決して少なくない。以前は、長男を済州島出身の女性と結婚させようとする傾向があったが、現在はそのような傾向がみられない。コミュニティには、結婚しないまま年を重ねていく独身の男性と1世の母親が同居する世代も少なくない。在日であるがために結婚に制約される要因に、日本社会全体の晩婚化により結婚そのものが難しくなったことが加えられた。在日、すなわち社会的に差別される立場にあるマイノリティという点で、二重に難しくなったといえる。

6. 韓国社会の変化と済州島

2000年代に入った韓国社会は、外からみてどのように映ったのだろうか。1990年代後半に地方自治が復活して政治的に民主化が進み、社会・経済的には急激にIT化が進む中、「IMF」といわれる‘金融危機’に見舞われた。しかし、「IMF」は、韓国社会に大きな傷跡を残しているが、その問題を短期間のうちに克服する底力をみせながら、徐々に自信を取り戻していった。韓国社会が対外的に自信を持つようになった決定的な契機は、2002年のワールドカップサッカー大会といえる。2002年のワールドカップサッカー大会を成功裏に終えることができた。その過程で定着した‘応援文化’、広場や道での大規模の応援は韓国や世界的見ても新しい経験であった。一般の市民や学生が自発的に広場に集まり一緒に応援することを楽しむ新たな文化現象を作り出したのである。もちろん、競技の勝敗も重要だったが、自発的な市民参加の祝祭として韓国の‘応援文化’は新しい扉を開いた。当時、世界的に競技場で問題行動をするフーリガン対策が深刻な議論の対象になっていたし、日本でもサポーターが応援をしながら問題行動をしたため、マスメディアによって取り上げられていた。それに比べ、韓国の‘応援文化’は熱狂的な応援だけでなく、応援が終わった後ゴミまで自発的に片付けるマナーの良さを見せた。そして、ワールドカップが自国チームが勝利しないといけない国際大会ではなく、‘楽しむお祭り’を多くの人々が一緒に盛り上がり楽しんだという点でも日本と韓国は大きな差を見せた。その過程を通して、韓国の人々が持っていた経済発展はしたものの、とくに自慢できるようなこともない辺境の国から‘応援文化’が国際的に注目をされることで、韓国も悪いところではないという実感とともに自信を得ることができた。それこそ、市民参加という意味で日本を越えた決定的なことであった。

当時、韓国人の応援は、韓国国内だけでなく世界各地にいる韓国人コミュニティでも行われた。筆者が観察によると、カナダのトロントの韓国人コミュニティでは飛行機を飛ばして空に応援のメッセージを書くことで応援の雰囲気を高めたり、飲食店を経営する店主は飲食店を無料開放するなど、それこそコミュニティを挙げて応援をしていた。そして、現地にいる留学生も応援と一緒に楽しむために韓国人が集まっている都市へ出かけて集まって応援を行った。応援も世界にいる韓国の人々が集まり、同時多発的に楽しむ姿を見せていた。

ワールドカップで見せた韓国の姿は、韓国社会が成し遂げた民主化と経済発展などが複合的に作用し、「韓国が貧しい辺境の国」という劣等感を克服して希望に満ちた未来を象徴するものであった。

韓国の人々が、自分たちが主体的に韓国社会の行方を決めていくという実感は、その後も続いた。2002年終わり大統領選挙で当初の予想をひっくり返しノムヒョン候補が当選した。そこには‘ノサモ’という市民が自発的に参加支援したことが決定的な決め手となった。ノムヒョン候補の当選は、選挙前の調査をした研究者や新聞に論説を書く論説委員など、誰もが予想できなかったことである。当選が確定する日の朝、筆者はオーストラリアのキャンベラで韓国政治が専門の韓国人政治学者と

一緒にいた。彼女は、ノムヒョンの当選にパニック状態に陥っていた。一月前にソウルに行って調査したが、全くそれが予想できなかったことを嘆いていた。ノムヒョンの当選が意味することは、これまでの韓国社会の常識を覆すような変革であり、歴史的な意味を持つことであった。しかし、ノムヒョンの当選に慌てるのは、政治学者だけではなく。同日夕方、シドニーからソウル行き飛行機に乗った際、飛行機が揺れるほど韓国人乗客同士が挨拶をしていた。その内容は、韓国社会が本当に望ましく変化しているし、もっと民主化に向かうことを期待していた。次の日の朝、インチョン空港に降りて、主要日刊紙を集めて読んだ。どれもノムヒョンが当選することを予想できなかったことに慌てる論調で一貫していた。それがノムヒョン時代を開く韓国の象徴的な姿であった。そして、ノムヒョン時代が始まったが、一年後弾劾される事態に陥る。それに対して韓国の市民は、‘弾劾反対のキャンドルデモ’を行った。外国に住む韓国人にとって韓国のニュースを把握することは、主にインターネットを通してである。‘弾劾反対のキャンドルデモ’も韓国国内だけでなく、インターネットを通して同時多発的に世界的に行われ発信された。こちら、ワールドカップの際、応援と同じように祝祭的な意味合いを持つものであった。それには、韓国人だけでなく、ノムヒョンを応援する外国の研究者も自分たちができる方法、たとえば大使館に抗議の手紙を送るなどで加わった。しかし、ノムヒョン弾劾反対のデモのニュースが日本ではあまり重く扱われなかった。そこには、ノムヒョンが‘反日’的だから気に入らないということと、韓国人々が立ち上がり国の行方を決める積極的な姿が日本人に知られることが望ましくないということが現れる。

同時代に、両国には日本の保守(小泉総理・石原東京都知事)と韓国の進歩という正反対の方向を目指す指導者がいて様々な意味で衝突しながらも、両国関係、文化および市民レベルの交流では近くなった面と、靖国参拝や独島(日本では竹島)の領有権問題など、その後も問題が拡大されることが残される。

しかし、去る10年間、韓国社会が力動的に変化していく新しい韓国を見せていたが、後に政権が変わり市民参加の政治ではない、すなわち民主化が逆行するような姿も鮮やかに見せている。去る10年間の韓国社会を経済的な面から見ると、格差が広がり拡大再生産され、経済的な安定とは距離があった。それにも関わらず、社会は活気があり、経済の状況を深刻な問題として受け止めない希望に満ちた雰囲気があった。

日本人は2000年代に入って韓国社会が市民中心社会へ変化することを見ながら羨ましかった。とくに、ノムヒョンに関しては‘反日’がけしからんという反感も強かったが、その反対に‘志が高い’という評価があり、そのような指導者がいないことを嘆いた。それは、単に韓国と日本を比較したのではなく、世界的に見てもノムヒョンは珍しく‘志が高い’指導者と評した。それで、ノムヒョンの演説を格調が高いということで翻訳し、大学の授業で教材として使うこともあった。市民参加を良しとする日本人にとっては、2000年代に入った韓国はいつの間にか市民参加型の市民社会を構築していく様子に嫉妬を覚える対象でもあった。

それでは、済州島を中心に見よう。済州島がより済州島らしい色彩を現すことができたのは、90年代後半の地方自治化以降といえる。それ以降、済州島は、韓国の一地方として済州島らしい個性を現すことができなかったことから、済州島的な個性を現すことができる方向に転換した。その影響で、その間あまり省みられなかった在日済州島人に関する施策がある。故郷訪問や太平洋戦争で亡くなった人々の遺骨を日本から返してもらい墓地に安置しようという動きもあった。その他にも在日済州島人に関連することを済州道庁と東京・大阪にある道民会を通して行っている。

その一方で、‘韓流’の影響により、日本人男性中心の観光地だった済州島が、日本人女性も訪れ

る観光地へ変わってきている。男性中心の観光には、賭博やゴルフそしてセックスがセットになっている。日本人男性にとって以前韓国の観光が‘キーセン(妓生)観光’を意味していたように、男性中心の観光は、良いイメージよりネガティブな印象を与える。そこから文化を楽しむ女性中心の観光に変わることはネガティブな男性観光を減らす効果があり、女性中心の観光は、家族中心の観光に波及する効果を持っている。近年は、日本から‘韓流’ドラマの撮影地を見る目的で中高年の女性だけでなく若い世代にも楽しめる観光地として変化し始めている。

しかし、済州島側、済州島の人々は、在日済州島の人々にどのような関心を持ち関係を形成しようとしているか、が明らかではない。済州道庁と道民会との繋がりはごく一部のつながりであり、道民会が在日済州島人を代表する団体とみることは難しい。たとえば、在日済州島人が済州島と自分たちが繋がっていると認識している、冠婚葬祭において相互扶助を行う村別親睦会や親族会がある。道民会は、村別親睦会の上部団体ではない。在日済州島人の認識として道民会は、事業に成功した金持ちの集まりとして見られている。

済州島の人々は、上から一方的に決められることを受け入れないし、信頼しない傾向がある。たとえば、済州道庁と道民会の繋がりを行政的なことの一部として看做し、自分たちが所属する地縁結合的な共同体を代表すると看做さない。自分たちが所属している共同体として実感するとき、村のために人が動き始める。一人が動き始めると、村の人々を説得して動かすことができた求心点になる1世が各村にいた。それこそ、村の人々の面倒を見ることを重要な人生の目標として生きていた1世がいた。そのために、在日済州島人の共同体(村親睦会という名称で)が各村にあったし、そこを通して故郷の村を助けてきた。村親睦会は、故郷の村を助けることに留まるのではなく、在日済州島人のアイデンティティの維持や冠婚葬祭における相互扶助をはじめとする文化を維持することができた。しかし、そのような1世が高齢化、または亡くなっている。

7. 1世が主導的だった故郷(出身村)との関係

これまで、1世の主導的な活動によって在日済州島人(村親睦会)が済州島(出身村)を支援したり、家族や親族を支援することが主なことであった。出身村を支援することは、村に共同水道を設置したり、学校を建てたり故郷にいる家族や親族を含む村の人々が共同で使える公共事業的な支援から済州島が発展にいたるまで、物心両面で支援をしてきた。その支援は、在日済州島人の生活が日本で豊かだったためではなく、時には日本の家族の生活を犠牲にしながら支援をしていた事例もある。しかし、そのような支援は、80年代オリンピックが終わった後、ほとんどなくなった。つまり、在日の側から見ると済州島(出身村)が、もはや支援をする必要がないほど豊かになったとみた。それから個人的なレベルで、家族共同墓地を作る際、在日済州島人が多くを負担することもよくみられた。それには、自分たちが故郷を離れて暮らすため、墓祭や墓の草刈りに参加できなかつたり、故郷の親戚に先祖の墓の面倒見を任すことのために負担を分けるという意味があった。そして、済州島人が働きに日本に行った際も1世がそれを助ける関係であった。日本にいる1世は故郷にいる家族や親族に支援をし、故郷の人々はそれに依存する関係で、心理的には互恵的であるが、経済的には日本にいる親族に頼る一方的な関係であった。それが続くことで故郷にいる人と日本にいる人の理解が異なることで関係が疎遠になる。その一方で韓国の経済が発展するに従い、済州島も昔のように貧しいだけの済州島ではなく、経済的に自立できるようになった。それから、1世が高齢化とともに、故郷には近い家族や親族が亡くなり、故郷とはいえ、出身村には近い人間関係がないこともある。

8. 2世は、家族・親族中心に

1世が亡くなることで、2世や戦後密航した1世が済州島との関係を主導しているが、同時に済州島人が他所へ移住するケースも多くなっている。そのため、故郷との交流は、1世のように出身村中心ではなく、家族や親族中心に変わってきた。それに他所に移住する済州島人が増えたことにより、故郷に残っている家族や親族に先祖の墓の面倒を見る責任や故郷にいる親戚と周囲の人々の冠婚葬祭への付き合いの負担が相対的に大きくなった。故郷を離れて暮らす人々は冠婚葬祭の際だけ故郷に帰ってくるができるが、故郷に生きる人々にとっては、日常的なことになり、その負担も大きい。済州島のライフスタイルも農業や漁業中心の生活から都市生活者と変わらない忙しい生活になった。人々に以前より気持ちの余裕がなくなることも事実である。何よりも、2世は、1世のように故郷の村で生活を共にすることで築かれる共有する思いがなく、親族とはいえ親しく交流した経験がなければ、儀礼的なことになり、場合によっては言葉も通じない外国人のように距離を感じることもある。それによって、お互いが期待することに答えられなかったら交流が続くことも難しくなる。

以前は、1世が済州島に行って家族とともに同じ家で過ごしたが、2世は親族と同じ家で過ごすことにも気を使うため、ホテルで泊まるようになる。済州島にいる親族も自分らの生活があり、以前1世のように親族の家に泊まり一緒に過ごす仕事と仕事の負担が増えるためお互いが不便な思いをする。お互いが用事を済ましたら早く別れる方がよい。以前のように冠婚葬祭を共にすることによってお互いが交流をしながら良く知らなかった親族も知るようになるのではなく、親族だから一緒にしないといけない義務として冠婚葬祭がある。1世の中には、済州島に墓を作る場合もあるが、日本に墓を作っていることが多くなった。2世やそれ以降の世代にとって墓参りが無くなると、済州島との接点は無くなるばかりである。済州島は自分の故郷ではなく、祖先の故郷になる。

実際、1世たちは、2世やそれ以降の世代に故郷との関連を持たせるべく多くの努力をしてきた。機会を作っては故郷に連れて行ったり、墓の草刈りにも必ず参加するように周知させた。子孫に済州島との行き来をさせるために、自分の墓を済州島に作ったケースもある。しかし、1世にとって済州島が故郷であるが、2世にとっては親の故郷であるだけで、自分が住んだこともないところに愛着を持つことは難しい。他所に移住した済州島人が故郷の村と関係を持つより、家族中心の付き合いに変わるように、日本に住む済州島人も世代が進むに従い故郷から遠くなる。

北朝鮮にいる済州島人も1世が中心になって往来をしたり、物質的な支援を続け関係を維持してきた。しかし、北朝鮮にいる人たちが、近年北朝鮮が置かれている状況により韓国や日本に生きる人々より早く亡くなり、世代交代が進む一方家族や親族の交流が中断され、北朝鮮、韓国(済州島)、日本にいる人々がお互いに孤立していく。

それに2000年代に入り日本の長期不況や製造業の空洞化により在日済州島人が従事する業種にも大きく打撃を与え生活にも深刻な影響を及ぼした。同時に差別が深化する日本社会で若い世代の帰化が増加した。しかし、帰化は経済的な意味で上昇を約束する要因ではない。国籍による差別対象から、差別対象でないこと变为ることである。老人世代には、国民年金がもらえなく経済的に難しい人々も少なくない。それ以前は、年をとっても周囲の下請けの仕事を手伝うなり、家で内職をすることで自分が生活をしたり、子供や孫に援助することができたが、仕事なくなることで自分の生活も難しくなる場合もある。

9. 済州島が主導する関係形成-創られる故郷・新たな関係の模索をめぐって

今後、在日済州島人と済州島人の関係は、済州島(人)側が積極的に働きをかけることがなければ、在日済州島人との関係は疎遠になる。在日済州島人の世代交代により、済州島で生活経験を持ち、具体的な関係性がある人たちは段々少なくなる。これまで故郷との関係を維持してきた世代が亡くなると関係を継続的に維持することは難しいと考えられる。

たとえば、1世が形成した関係を2世が継続的に維持するには、済州島と日本両方で展開した生活があるだけにお互いの距離が遠くなる。2世までは済州島が故郷になるかもしれないが、それ以降の世代には祖先の故郷である。そして、済州島も以前と違い貧しいところではなくなった。以前は、貧しい故郷を助けようとする心情があった。互いに助け合い、それに依存する相互依存的な時代もあったが、今や各自が自立して生きていく時代である。それだけに、心情的にお互いが近くなる交流をする努力がなければ遠く離れていくばかりである。日本の経済が低迷することで在日済州島人の生活にも影響し、社会の雰囲気も殺伐としているだけに在日済州島人からみれば、済州島の生活が余裕があるように見える。済州島の生活が必ずしも経済的に豊かな訳ではないが、生活環境が豊かといえ余裕があることも事実である。家族単位で見ると、済州島にいる家族が外にいる家族を繋ぎ止める努力をしないと家族といえ、遠くなる。

日本で1世が蓄積してきた文化遺産、たとえば、1世が所蔵していた図書や資料なども済州島で適切に活用されるなら、済州島に入ってくるであろう。しかし、済州島で活用される見込みがなければ、他に行く。近年、在日済州島人が所蔵している資料に注目し、必要としている外国の図書館がある。近年日本の雰囲気はあまりにも殺伐していて、北朝鮮関係の資料を所蔵し保管維持を願うことも難しい状況にある。2010年6月豪州の国立図書館の司書とともに在日済州島人1世と会い、北朝鮮関係の所蔵資料を5箱渡した。その種の資料をカナダ国立図書館でも必要だという依頼があった。豪州国立図書館もこれからも続けて収集していくであろう。このような趨勢は、学問分野においてアジア関係が発展することによって、とくに近年北朝鮮関係の資料を求める傾向にある。済州島からみれば、在日済州島人1世がそのような資料を個人的に所蔵しているため、それを受け継ぐに良い条件を持っている。しかし、そのような遺産を受け継ぎ適切に活用する基盤がなければ他所に渡っていく。1世が健康なうちにその用意をしておかないと、1世が済州島に渡したくても済州島に入って来れない。

済州島では、在日済州島人とどのような関係形成をしようとするか、関係性の構築を明確にする必要がある。そうしなければ、在日済州島人が持っている有形・無形の資産や遺産も済州島のものにならない。それに、済州島に移住して入ってくる人々を受け入れながら、外に出ている済州島人にも開かれた‘創られた故郷’であり、未来に向けた‘新たな関係’形成が望まれる。このようなことは、済州島内外にいる済州島人が知恵を出し合うことで新たな方向が見えるのではないだろうか。まずは、在日済州島人に故郷を愛し、支援してくれることを願う前に、在日済州島人が日本で移民として、マイノリティとして生きてきた歴史、現在おかれた状況を理解しようとする事より始める必要がある。お互いが、相手を知り、理解しようとする努力こそが、‘新たな関係’や‘創られた故郷’に近づく一歩になるであろう。故郷済州島が積極的に‘新たな関係’を模索する際、日本にいる済州島人にとって気持ちの上で大きな支えになり、‘創られた故郷’に近づくであろう。

注

- 1) 本稿は、2010年7月済州島で開かれた「在外済州島人の愛郷心に関するセミナー」で、在日済州島人と済州島について報告したものを基に文章化している。セミナーに招待してくださったことに深く感謝している。